



教皇様の聲

聖マリアによる

真のキリスト者

真のキリスト者の基本的な特徴について聖母マリアが教えておられることを、私はここで特に強調したいと思えます。真理において誤りがない、時代を経ても揺らぐことのない教会を建てるにあたり、イエズスは本当のキリスト者であるためのいくつかの客観的な基準を設けられました。

第一の基準は恩寵にあふれた生活です。人類を罪から救い出し、「原罪」を消す洗礼を通して人々に神的(超自然的)な生き方を回復させるために、神は人となられたのです。すなわち「主はわれら人類のため、またわれらの救いのために天より降り、聖霊によりておとめマリアより御からだを受け、人となりたまえり。」使徒信経の中のこの言葉は私たちの心に刻みつけられており、人間の偉大さと尊厳を想起させます。と同時に

客観的な基準

に、マリアの驚くべき使命についても考えさせられます。マリアは神に選ばれて贖い主の母となり、受胎の時以来悪を免れ、恩寵の一大傑作となられたのです。

キリストと教会の母なるがゆえに恩寵に満ちた母マリアが、恩寵のうちに生き、三位一体そのものの営みに加わることの崇高さ、大切さ、必要性を皆さんにはっきりと気づかせてくださいますように。三位一体の神の生命に与るとは言え、この世に生きる今は、信仰によって歩んでいるわけですから、全てが明らかに見えるというわけにはいきません。しかし、のちには栄光ある喜びに満ちた天の光に包まれるのです。現代社会の考え方や世俗化した行動が生み出す、時にはきわめて大きな困難に打ち勝つため必要な光と力を得ようと思うなら、深く理解し、実行すべきこの超自然(恩寵)の生活を送る以外に方法はありません。

真のキリスト者の第二の特徴は信

仰の告白であり、これについてもマリアは私たちの模範であり、先生です。神の母としての独特で崇高な使命を果たすべく神から呼びかけられた聖母は、すべてを神に負っていることを知っていました。そしてその使命を受け入れました。マリアは御告げの時からイエズスの受難と復活に至るまで、さらに使徒や弟子たちと高間で聖霊降臨を待ち望んでいた時も、そして一生を終えるまで忠実に誓いを守ったのです。本物のキリスト者になるうと思えば、こうでなければなりません。御昇天の前にイエズスは、「聖霊があなたたちの上にくだり、力をお与えになる」(使徒行録1:8)と仰せになりました。

これがキリストの弟子としての務めであり、二千年の間続けられ、これからも永遠に続いていくのです。「人々の前で私の味方だと宣言する者、私もまた天にいます父の前で味方だと宣言しよう」(マテオ10:32)といわゆる「世俗化」により、社会及び政治の場においても個人生活や家庭生活においても「信仰の告白」は今日ますます難しく、勇気のいることとなってきました。この現象は現代社会に深く浸透し、不可知論や無

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1988
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

『教皇様の声』100号記念

SECRETARIAT OF STATE
VATICAN CITY
No.219685
June 28, 1988

The Holy Father was pleased to be informed that the monthly *Kyoko-sama no Koe* has reached its hundredth issue and he wishes me to convey his cordial greetings to the Staff and Readers.

His Holiness encourages you to continue in this necessary and fruitful endeavor which brings the teachings of the Pope and the Holy See directly to the faithful in Japan.

As a token of his spiritual closeness His Holiness imparts his Apostolic Blessing to you all.

With personal best wishes, I am

教皇様の祝福
ヨハネ・パウロ2世教皇様は、本紙100号を記念して、関係者および読者の方々に、使徒的祝福を送ってくださいました。

Sincerely yours in Christ,
+ S. Cassidy
Substitute

関心主義と共に、道徳、人道、キリスト教の原則を崩壊に導いています。このためキリスト教信仰の告白にあたってこれまで以上に断固とした勇気をみせるべきです。キリスト教信仰は永遠の救いをもたらすばかりでなく、地上における平和、一致、落ち着きの泉となるからです。

最後に、キリストが明白に示された真のキリスト者の第三の特徴は、愛徳の実行です。確かにキリストは相互の愛、隣人への愛、完全に自己を捧げることについて何度も語っておられます。「私は新しい掟を与えらる。あなたたちは互いに愛し合え。私があなたたちを愛したように、あ

なたたちも互いに愛し合え。(ヨハネ13:34) イエズスは言葉や信心だけでは満足されません。信仰は實際の行ないに表われるべきで、まず隣人に愛を示さなければなりません。神はその摂理によって私たちを兄弟の中に置かれました。私たちは誤りをとがめ、悪と戦う一方、この兄弟たちに対して物心両面で愛を示すべきなのです。「憂き人の慰め」、「貧しき者の母」、「罪人の抱り所」である聖母マリアが、不和や苦しみを持たずに、勇気をもって献身的に、素直で寛容な心で常に他人を愛せるように皆さんを導き、助けてくださいますように。(八八・三・十九)

公会議と 教会の信仰



1 (一) 公会議では、深く理解し

た事柄を当時の日常の言葉を使って表現していました。すなわち、哲学と神学の諸学派が概念を導入する前のことで、その当時の人々の物の見方や考え方を自然に表わす言葉を使っていたのです。教父たちは研究と省察を重ね、表現の方法を改善すべく努力を続けました。教父時代の後、キリスト論に使われた概念や用語、特にペルソナ(Persona)は、より詳しく説かれ、明らかになり、測り知れない貢献をしました。しかし、それらが啓示された真理を言い表わす時、特定の著者や学派と結びついたり、制約されたりしたことはありません。当時の人々の日常語だったわけで、この点についてはその言葉の定義を分析すればよくわかります。

2

最近、啓示された事柄を現代哲学や科学の概念に対応する言葉にあてはめようとして、昔からの用語、とりわけ三位一体の神学にとっては根本的な本性(Natura)とペルソナ(Persona)の区別を受け入れることに抵抗を感じる人がいます。特に言語哲学、相対主義、主観主義、実存主義、構造主義などの前提に依存した解釈を主張する人々は、昔からの概念と用語が、スコラ主義、形式主義、静態主義、非歴史主義など

3

の影響を受けており、今日(生きるキリスト)の秘義を表現するには不適当として、それらを軽視したり拒否しています。

何が起こったのでしょうか。第一にこの人々は、哲学と神学の新しい流れに結びついた概念と用語を受け入れ、新しい型のスコラ主義に陥ってしまったのです。新しい概念や用語を普遍的(共通)に理解されている意味と比べてみようともしないのです。今日においても、思想と生活において互いに意志の疎通を図るために必要とされる相互理解のことで、第二に、すでに予想されてはいましたが、言葉の問題がきっかけとなって始まった危機は、ニケアとカルケドンの教義を相対化する方向へ移行しました。(彼らに言わせると) 両公会議の教義は、歴史上の一時期の解釈にすぎず、もはや時代遅れで現代人の知性にあわないと言われている。このような移行は危険であつただけでなく、今も危険であることに変わりありません。啓示された事柄に対立するようにするのは目に見えているからです。

4

新しい用語を使う人たちは、イエズス・キリストの内に(人間のペルソナ)が実在すると言います。この説は人格に関する現象論的な概念を根拠としたもので(一)、存

在論のいう主体について充分に考慮していません。その結果、神としての位格(ペルソナ)とは、イエズスが自らの内にある神的な要素を自覚することにすぎない、ということになります。すなわち託身(受肉)とは、超越し先存する神の(私)が人間性をとったことを指す、ということが全く理解されていないのです。こうした新しい概念はマリア論の中にも忍び込んできました。公会議の教えによれば、キリスト論と密接な

関係にある教義、つまり(神の御母)の理解の仕方にも大きな影響を与えています。このような場合、必ずと言ってよい程「本性」と「ペルソナ」の区別が否定されています。ところで、過去の公会議は、日常語から採用了これらの言葉をキリストの秘義を解釈するための鍵(要)として、その意味を厳密に、また明確にする努力を続けてきたのです。

わすかし触れませんでした。努力を続けてきたのです。が、これだけでも神学と要理

関係にある教義、つまり(神の御母)の理解の仕方にも大きな影響を与えています。このような場合、必ずと言ってよい程「本性」と「ペルソナ」の区別が否定されています。ところで、過去の公会議は、日常語から採用了これらの言葉をキリストの秘義を解釈するための鍵(要)として、その意味を厳密に、また明確にする努力を続けてきたのです。

キリストの御母よ、今日私たちが一つの祈りに一致し、エリザベトの言葉を借りて御身に向かい御挨拶いたします。「御身は女のうちに祝せられたもう……幸せなこと、信じた方は。(ルカ1・42、45)

聖母よ、御身は真に恩寵に満ちた方で、その充滿により新しい世界は発展してきました。エンマヌエルの世界、人の内に在す神の世界、神の超自然的現実を包括する信仰の世界が。

聖母よ、この現実が御身の内にあり、また、神は御身の内におられます。「御胎内の御子は祝せられたもう。(ルカ1・42)

私たちは御身を見出すために、御告げの後訪問されたエリザベトの家へとやって来ました。と同時に天国へと開かれた戸口である被昇天——御父、御子、聖霊なる神御自身のものである被昇天——でも、御身を見出そうと望んでいます。ああマリアよ、私たちは、被昇天の日に御身を見出すためにここに

《被昇天》 聖母への あいさつ

しかし実際は、御身の御生涯の結実であつただけに、さらに深いものであつたにちがひありません。

御身は仰せられます。「私の魂は主をあがめ、私の精神は救い主である神により喜びおどります。主が卑しいはしために御目をとめられたからです。……全能者が私

に偉大なことをされたからです。(ルカ1・46・49)

そうです。マリアよ、神の御名は聖なるものです。そして御身の名は主においてその聖性に到達するのです。

それゆえ、代々の人々は御身を幸いなひとと呼ぶでしょう。(ルカ1・48参照) 今日、ここに集う私たちの時代に御身を幸いな方と呼ぶのです。それは全能の御方が御身と私たちに偉大なことをなされたからです。「その御腕の力を現わし」私たちのために救いの力を起こされました。(ルカ1・51、69参照)

ああ聖母よ、神の愛、太陽をまとった婦人よ、(生ける神の聖殿) に向かってこの地上を旅する私たちの偉大な印となる方よ、私たちの声を聞いてください。

御身の取り次ぎにより、この世の子らが(代々に至るその憐れみ)(ルカ1・50参照) に絶えず与ることができますよう、私たちに耳を傾けてください。(八六・八・十五)

説教・講話・書簡等の抄記

□ 本日はあの愛すべきレバノンの地とレバノン人の聖母信心に心を向けましょう。13年にわたる大いなる苦難の時代を通して、全てのレバノン人にとっていとも聖なる乙女「レバノンの聖母」への祈りは休むことなく熱心に行なわれてきました。人々は試練、願い、希望を聖母に託してきたのです。

レバノン人の聖母信心は絶え間なく続き、伝統に深く根差しています。人々は聖書にみられるレバノンへの数多くの記述を聖母に結びつけて考えます。ですから喜びの内に高らかにこう歌います。「レバノンより来たれ」マリアよ、あなたは「レバノンの杉」のごとく立たれ、その衣の香りは「レバノンの香水」のようだ。ロレットの連禱(聖マリアの連禱)を唱える時、「くすしきはらの花」に続いて「レバノンの杉よ、我らのために祈り給え」という言葉を加えています。

□ カトリック教徒、ギリシア正教徒、イスラム教徒から成るレバノンの人々はこれらの聖書の記述を知っており、聖母から深い恩を受けていると感じています。そのため、聖母が敬われている場所は数えきれないほどです。(…) 家々では就寝前にロザリオを唱え、広く知られた賛歌「Ya Ummai, -Ilah, (ああ、神の母よ)」を歌い、マリア像による祝福を受けます。

マロン総大司教管区の教会は全て聖母に捧げられています。(…) レバノンではどんなに小さな村にも聖母に捧げられた教会や、礼拝堂があります。

□ レバノンからの移民たちはこの聖母信心を携えて行きまし。あらゆる移住先の国でレバノン人が建てる最初の教会は「レバノンの聖母」に捧げられています。パリ、マルセイユ、ボストン、サンパウロ、シドニー、ダカール、アビジャン、ロンドンなどに見られます。管区ではないワシントンに建てられた最初のマロン派神学校は「レバノンの聖母マロン派神学校」と名づけられました。

最も規模が大きく、全てのレバノン人に大変慕われているマリア聖所は、ハリッサの丘の上にある「レバノンの聖母」の聖所です。聖所のわきに立つ大きなマリア像は開いた両手を海と首都ベイルートの方へ差し伸べています。レバノン人全てに母としての守護を約束しておられるかのようです。一年を通じて、特に五月は、非常に多くの巡礼者がこの地を訪れます。

霊的巡礼⑦ レバノンの聖母

私たちがレバノンの人々と心をつなげて、平和、一致、そしてレバノンを悩ませている数々の問題の早期解決を聖母マリアに祈りましょう。

レバノンの人々が愛し、二月二日に聖ペトロ大聖堂でマロン派典礼で歌われた賛歌を聖母に捧げましょう。「ああマリアよ、山と海を治める女王よ、レバノンの守り主よ、あなたの全ての子供たちに目を向けてください。その両の手を差し伸べて、祝福をお与えください。」(八八・二・二十八)

アフリカの聖母

霊的巡礼⑧

今日の心の巡礼では象牙海岸のアビジャンにある「すべての恩寵の母なるアフリカの聖母」と呼ばれるマリアの聖所を訪ねましょう。この呼び名には福音宣教への願いと献身、アフリカ全大陸奉獻の想いなどがこめられています。

この聖所はたいへん新しく、一九八七年二月に完成しました。この地方への牧者としての最初の訪問の際に、私は礎石の祝福をしました。地元のカトリック団体の献身的な努力によって建てられたこの聖所は、空に届きそうな外観をし、塔は天をさす指を思わせます。

聖所の入口には福音書にあるマリアの言葉が大きく刻まれています。「私は主のはしためです。あなたの御言葉のとおりになりますように。」

聖所の内部は、大きく美しい窓から光が採り入れられ、多数の信者が参加して様々な儀式が行なえるようになされています。螺旋状の丸い大屋根とその上にそびえ立つセメント造りの塔は、遠く離れた道を行く人たちの目にも止まります。夜になり灯がともされると、あたかもこの地におけるマリアの存在を目にしているかのようです。

敬われている聖母の像は、この国の若い彫刻家が高価な木材を用いて彫り上げました。象牙海岸の女性特有の顔つきをし、背の高くほっそり

とした立像です。しかし、髪型と衣装はどの民族のものでありません。優しい微笑みを浮かべたマリアはイエズスを抱き、イエズスは信者の人々に腕をさしめています。

彫刻家は深い神学的な真理をこの像で示そうとしたのです。すなわち、神の子は女性から生まれた。そしてマリアというこの女性から私たちに授けられたという真実です。

マリアの母としてのしぐさは全く自然なものです。その若さは、罪の汚れに一度も触れたことのないマリアがすべての時代に属するものであって、その子イエズスと同様に私たちの時代にもおられるということを感じています。マリアの微笑みは平和、魂の喜び、常なる内省の心、そして彼女を聖霊の宿る恵まれた場所とされた神への愛を物語っています。

マリアは体と魂の両方において神の至福の栄光を表わしています。しかし私たちにとってはベトレヘム、ナザレト、エルサレムという土地で、つまり私たちと同じようにこの地上に生きた女性としていつも心の中におられます。すべての民族、従ってアフリカの女性の特徴をも有し、また至る所にいる子供たちそれぞれをそばにおられる愛情深き母として私たちはマリアを受けとめています。マリアは神から受けた何物をも自分のものとはせず、いつも御子を私たちにさし出しておられるのです。自ら持っているものはすべて与えられ、御自身をも比類なき母の愛と共にさし出されます。

真の人

イエズス・キリスト

キリスト シリーズ ⑭

真の神、真の人であるイエズス・キリストの秘義は、私たちの信仰の中心であり、キリスト論の重要な真理です。今回は、聖書、特に福音書と、キリスト教承伝(聖伝)のなかにこの真理の根拠を探してみましよう。

すでに述べたように、キリストは御自分を神の御子として示しておられます。「私と父とは一つである」

マリアは体と魂の両方において神の至福の栄光を表わしています。しかし私たちにとってはベトレヘム、ナザレト、エルサレムという土地で、つまり私たちと同じようにこの地上に生きた女性としていつも心の中におられます。すべての民族、従ってアフリカの女性の特徴をも有し、また至る所にいる子供たちそれぞれをそばにおられる愛情深き母として私たちはマリアを受けとめています。マリアは神から受けた何物をも自分のものとはせず、いつも御子を私たちにさし出しておられるのです。自ら持っているものはすべて与えられ、御自身をも比類なき母の愛と共にさし出されます。

この聖母マリアの年に、あの希望の大陸アフリカ全土が人類の救いの光と愛をより一層受け入れることができるように祈りましょう。(一九八八・三・六)

不変の教え

す權威(ヨハネ20・22、23参照)を含んでいます。イエズスは御父から、この世に最後の審判を宣告する權威をお受けになりましたから(ヨハネ5・22参照)、「見失ったものを尋ねて救うために」(ルカ19・10)この世に來られたのです。

全被造物に及ぶ神としての權威を確証するため、イエズスは奇跡を行なわれました。それは、神の国が彼と共にこの世に入ったことの「しるし」でした。

2

「御業と御教え」によって神の子であることを証明されたイエズスは、同時に、真の人間であることもお示しになりました。イエズスが何よりも明白に意識しておられたこの真理を新約聖書全篇、とくに福音書が証明しています。使徒や福音史家たちは、少しの疑いもなく、これを認め、そして伝えました。今回は簡単に、この真理に関する聖書のデータを集め、真の神としてのキリストの考察と関連させながら、真の人間としてのキリストについて考えてみましょう。

イエズスを特異で驚くべき人間だとは認めるが、とにかく単なる人間に過ぎぬ、と考える傾向が広まっています。従って先に述べた方法に従い、神の御子の真の人性を明らかにするのが今日非常に大切だと思われまます。現代の特徴とも言えるこの傾向は、ある意味ではキリスト教初期のドゥチェティスムス(キリスト仮現論)の正反対です。この異端によると、イエズス・キリストは人間の姿をして人間のように見えるだけで、あくまでも神であるというのでした。

聖霊によるキリストの人性

3

このような相反する傾向に直面する教会は、カトリック要理の教えにあるように、キリストは神であると同時に人間である。すなわちキリストは真の神であり真の人間であって、神性と人性との二つの本性を備えたみことばの唯一のペルソナであると宣言します。これこそ多くの光を投げる深遠な信仰の秘義なのです。

キリストの真の人性に関する聖書のテキストは数多く、どれも明白なものです。続く考察のために、いくつかを列記しましょう。まず最初は託身(受肉)です。使徒信經中に、「みことばは肉體となられた」と宣言されています。この真理は、ヨハネ福音書のプロローグ中に見事に表現されてあります。「みことばは肉體となつて私たちのうちに住まわれた」(ヨハネ1・14)ギリシャ語で肉體を表わす語は「サルクス」ですが、これは、実際にそうであるように人間が肉體を有する故に不安定で弱く、つかの間の存在であることを示しています。(イザヤ書40・6には、「肉は草のようなもの」と記されています。)

この意味でイエズス・キリストは真の人間でありました。イエズスは、ナザレトの処女マリアから肉體と人性をお取りになりました。アンテイオキアの聖イグナツイオがイエズスを「サルコフォロス」(肉體をもつ方)と呼んでいます。それは一人の婦人から人間が誕生したという事実を鋭く示唆しています。この婦人がイエズスに「人間のからだ」を与えた

4

の夜の出来事を記し、一婦人からのこの誕生を伝えています。「そこに居る間にマリアは月満ちて初子を生んだので、布に包んでまくさ桶に子を横たえた」(ルカ2・6、7)誕生の八日目に御子は割礼を受け、「イエズスと名づけ」られた。(ルカ2・21)四十日目にモーセの律法に従い、神殿に「初めての男の子」として捧げられた。(ルカ2・22、24参照)イエズスは、他の子らと同じく「次第にすこやかに成長し、知恵に満たされた」(ルカ2・40)「イエズスは神と人の前に、その知恵も背丈も寵愛もますます増していられるのだ」(ルカ2・52)

5

福音書にたびたび記されている表現を読めば、一人の成人としてのイエズスが目に映ります。真の人間、肉體をもつ人間として、イエズスは疲れ、飢え、渴きを覚えられました。「四十日四十夜断食してのち、飢えを感じられた」(マテオ4・2)「旅に疲れたイエズスは泉のかたわらに座られた。…サマリヤのある女が水を汲みに来たので、『水を飲ませてください』と言われた」(ヨハネ4・6、7)

というわけでイエズスは疲れと苦しみを伴う肉體、死すべき肉體をもっておられることがわかります。その肉體で、ついには笞打たれ、茨の冠を被せられ、十字架につけられるという殉教の苦難を受けられたのです。

6

死を目前にした十字架架での臨終の苦しみのとき、「私は渇く」と仰せになりました。(ヨハネ19・28)この言葉には真の人性を示す最後のときを迎え悲しみに満ちた人間の心が如実に現われています。

7

イエズスがゴルゴタの苦しみを経験できたのは、真の人間であったからです。イエズスが経験されたような死にかたのできるのは人間だけです。キリストの死については多くの目撃者が居ました。友人や弟子だけでなく、ヨハネが語るように、兵士たちも確認したのです。「イエズスの所に来るともう死んでおられたので、そのすねを折らなかつた。その時二人の兵士が槍で脇を突いたので、すぐ血と水が流れ出た」。(ヨハネ19・33、34)使徒信經の中で教会は、イエズスの誕生と死の真理を宣言し、次に復活の真理に移ります。「三日目に死者のうちよりよみがえつた」。

復活によってイエズスが真の人間であることを再び確認できます。(…)真の人間だけが十字架上で苦しみ、死去することができたのです。真の人間だけが死者のうちよりよみがえることが可能であったのです。よみがえるとは肉體のうち生き返ることを意味します。変容し、新たな質と力を受け、(昇天と復活において)栄光をお受けになったのですが、それは真の人間の体においてでした。実際に復活されたキリストは使徒たちと接触されました。使徒たちはキリストを眺め、見つめ、その御傷に触れることができたのです。主は彼らに話しかけ、共に過

8

し、食物もお取りになりました。「彼らが焼いた魚一片を差し出すと、それを取り、彼らの前で食べられた」(ルカ24・42、43)最後に天に昇り、「御父の右に」座したのは、復活し、栄光を受けてはいらるるもの、真の人間の体においてであったのです。

キリストは真の神、真の人間です。外観だけでなく、幻や幽霊でもない、真の人間です。だから使徒や初代の信者がキリストを知ることができたのです。これこそ彼らが伝える証言です。

というわけで、キリストにおいて神であること、人であることは、相対立するものでないことがわかります。人間は最初から神の似姿として創られているので(創世1・27、5・1参照)、人間であることは、神であることを現わし得るのです。キリストにおいて実にはつきりとこの点が証明されています。人性を通して、真の人間の生活を通して、キリストは御自分の神性を啓示なさいました。キリストの人性は主の神性、すなわち御子のみことばのペルソナをあらわしているのです。

しかし、そのために神の御子が「より少く」人間であるというのではありません。御自分が神であることを示すために「より少く人間」である必要はなかったのです。キリストは完全に人間でした。みことばの神としての唯一のペルソナにおいて人性を取つたという事実こそ、キリストが完全な人間性を百分百実現しておられたことを示しています。これはキリスト論の人間学的な問題になりませんが、後に述べることにしましょう。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393